

# 『鉄腕アトム』の放送に関する時代考察

## ～編成と産業の視点から～

古田 尚輝

### 第1章 はじめに

第1節 評価の高まりと未熟な歴史研究

第2節 調査対象と調査法

### 第2章 1960年代前半の日本のテレビ放送

第1節 テレビ放送の量的拡大

第2節 新興産業としての放送

### 第3章 1960年代前半のテレビ編成

第1節 国産映画の空白を埋めたアメリカ・テレビ映画

第2節 海外アニメーションから国産アニメーションへの助走

第3節 「映画」国産化の進展

第4節 子ども向け番組の編成

### 第4章 民放3局の編成方針と経営

第1節 編成方針の違い

第2節 経営格差

### 第5章 アニメーション製作業の組み込み

第1節 放送とアニメーション製作業

第2節 放送局・広告代理店・アニメーション製作会社の関係

第3節 番組提供料と製作費

### 第6章 むすび

## 第1章 はじめに

### 第1節 評価の高まりと未熟な歴史研究

昨今、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』（2001年7月公開）や押井守監督の『イノセンス』（2004年3月公開）など日本の幾つかの劇場用アニメーションが海外に輸出され、一定の関心と評価を得ている。一方、作品の大半を占め

るテレビジョン放送用アニメーションは2003年には地上波で週84本<sup>1)</sup>が放送される盛況で、なかには『ポケット・モンスター』(1997.4～、テレビ東京系で放送)のように放送開始から3年も経たないうちに64の国と地域に輸出<sup>2)</sup>された例も現れている。日本のアニメーション産業の規模は、映画・テレビ放送・ビデオ販売を合わせて2002年で2,079億円<sup>3)</sup>、世界のアニメーション市場に占める割合は1996年で65%<sup>4)</sup>と推定されている。

こうした事例に刺激されたかのように、最近、それまでは“一部のマニアの占有物”と目されてきた日本のアニメーションに対する再評価が進み、同時に2つの議論が巻き起こってきた。

ひとつは、その国際競争力に着目して、アニメーションを日本あるいは地域の戦略的な産業として育成しようという提言や施策<sup>5)</sup>である。最近では、2002年(平成14年)11月に知的財産基本法が成立し(2002.12.4公布、2003.3.1施行)、翌年3月にこれに基づいて内閣に知的財産戦略本部が設置された。そして、各省がそれまで別々に行ってきた施策を計画的に実施し予算の効率的な配分を図ることとなった。戦略本部は2004年4月に「コンテンツビジネス振興政策」を発表し、アニメーション・映画・ビデオゲーム・音楽・文芸・写真などの創造物を幅広く「コンテンツ」と定義し、その振興策を概括的に示した。また同年5月には、「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」(通称「コンテンツ促進法」、2004.6.4公布・施行)が議員立法によって成立した。この法律は国などの公的機関が民間に委託したコンテンツの著作権を基本的に制作者に与える条項を入れた点に特徴があるが、人材育成や海外事業展開など国や地方自治体等が行うべき基本的な施策を網羅するに止まっている。一方、同年12月には、信託業法が1922年の制定以来80年ぶりに改正され、従来は土地等に限られていた信託財産の対象に著作権等の知的財産が加わり、映画やアニメーションなどの制作費を集める方法が広がった。

しかし、日本のアニメーションの製作と輸出は、政府の振興策や公的な助成がないまま純粹に民間企業の営利事業として行われ、現在の地位と評価を得るに至った経緯がある。政府の施策も、経済産業省が主管するデジタル技術を使った製作装置に対する助成や文化庁主催の「メディア芸術祭」<sup>6)</sup>のように受賞作品に対する賞金授与など対象も額も限られ、フランス等で実施<sup>7)</sup>されている作品制作に対する公的助成や融資、放送等における自国製品の割当義務(クオ

ータ)とは程遠いのが現状である。

もうひとつの議論は、前述した『千と千尋の神隠し』や『ポケット・モンスター』などの個々の事例を全体にまで拡大した“日本アニメーション礼賛論”の氾濫である。これらの中には歴史的な検証や客観的な評価の欠如が目立ち、なかには海外に輸出された作品の一覧を出典も明示せずに掲載している出版物や欧米で指摘されている暴力的で性的という日本のアニメーションに対する批判を意図的あるいは無意識に捨象した論考が見られる。

このような“性急な施策”や“過大な礼賛論”の出現は、日本のアニメーションに対する海外の評価が契機となっており、その意味では国外の評価をもとに国内での認知が進む従来からの日本文化再評価のパターンを踏襲している。現実には、日本のアニメーション業界はひとにぎりの個人・集団・企業が支えてきた側面が強く、ほかは長期にわたって冷笑や軽視、放任を決め込んできたとも言える。このことは、日本のアニメーション業界を強固な仲間意識に支えられた社会にするとともに、やや閉鎖的なものにしてきたとも考えられる。

日本の最初のアニメーション<sup>8)</sup>は、欧米に遅れて第1次世界大戦後の1910年代後半に製作されている。しかし、社会的な認知を得るようになるのは、国産テレビ・アニメーションの放送が隆盛に向かう1960年代後半以降のことである。このころからアニメーションという言葉が使われ始めるが<sup>9)</sup>、テレビ・アニメーションは20年余り「漫画映画(マンガ映画)」あるいは「漫画(マンガ)」と表記されていた。これがテレビ番組として地位を確立し言葉としても定着するのは1970年代後半のことである。たとえば、大手アニメーション製作会社のひとつ日本アニメーション<sup>10)</sup>がズイヨー企画から社名変更するのは75年、NHKが初めてアニメーションという言葉を使った番組『世界のアニメーション』(ヨーロッパ放送連合EBU加盟放送機関が製作した作品)を総合テレビで放送したのは76年4月、日本最大のアニメーション製作会社東映動画が東映アニメーションと社名変更したのはごく最近の99年のことである。

こうした社会的認知の遅れや業界の体質は、研究にも影響を及ぼしている。アニメーションの研究は戦前から細々と続けられてきたとは言えるものの、研究者が増え内容も多彩となるのは日本のアニメーションが海外でも注目され始めた90年代以降である<sup>11)</sup>。最近では国内や海外でも研究が進み、日本のアニメーションの歴史についても幾つかの著作<sup>12)</sup>が刊行されている。しかし、これ

らは主に劇場用アニメーションの作品や作家を対象としており、テレビ・アニメーションの歴史に関しては、文献の大半が当事者の内輪話や熱狂的なファンが綴ったものということもあって、学術的な研究が遅れている感が否めない。

日本で最初の本格的なシリーズ・アニメーション<sup>13)</sup>と言われる『鉄腕アトム』(1963. 1～66. 12 フジテレビ系で放送、30分 193話、虫プロダクション製作)の放送が始まってから今年で40年余が経った。

本論は、この機会をとらえて、『鉄腕アトム』がなぜ1960年代前半に放送されたか、その要因を番組編成と番組制作、それに産業の面から考察し、『鉄腕アトム』の時代を日本の放送史のなかに位置付けようとする試みである。

## 第2節 調査対象と調査法

本論では、対象とする時期を、『鉄腕アトム』が始まった1963年(昭和38年)を中心に1960年代前半とした。そして、その時期に、日本のテレビ放送が普及・編成・番組制作・事業経営の面でどのような状況にあったのかを調査することにした。

また、対象とする放送事業者を、国産シリーズ・アニメーションを先行的に放送したフジテレビ、ラジオ東京テレビ(KRT、現在のTBS)、日本教育テレビ(NET、現在のテレビ朝日)の3局<sup>14)</sup>とし、対象とするアニメーションも『鉄腕アトム』、『エイトマン』(63. 11～64. 8 KRT系で放送、30分 56話、TCJ製作)、『狼少年ケン』(63. 11～64. 12 NET系で放送、30分 86話、東映動画製作)の3作品(表1参照)として、必要に応じてほかの放送事業者や作品に言及することとした。

調査は文献と関係者への取材によって行った。これを初期の作品の視聴で補った。前述したように学術的な文献の不足は否めなかったが、関係者の回想録

表1 対象とする国産シリーズ・アニメーション

タイトル	放送局	放送期間	製作	提供社	広告代理店
『鉄腕アトム』	フジテレビ	1963. 1～66. 12 30分 193話	虫プロダクション	明治製菓	宣弘社
『エイトマン』	TBS	1963. 11～64. 8 30分 56話	TCJ	森永製菓	電通
『狼少年ケン』	NET	1963. 11～64. 12 30分 86話	東映動画	丸美屋食品工業	旭通信

(注：図表の出典は文末に記載。以下の図表も同様)

や手記、放送事業者やアニメーション製作会社の社史のなかには参考となるものも若干含まれていた。

参考までに『鉄腕アトム』の概要を記すと、この作品は漫画家の手塚治虫氏が1951年から雑誌『少年』に連載していた漫画を原作に、手塚氏自身が62年に設立した虫プロダクションが最初に製作したテレビ放送用のシリーズ・アニメーションである。物語は、7つの超能力を持つ少年ロボットのアトムが地球の市民と平和を守るために悪者たちと戦うサイエンス・フィクションである。平均視聴率は25%を記録し、その後のアニメーション・ブームのさきがけとなった。虫プロダクションは、経費の節約と継続的で効率的な製作を図るため、“三コマ撮り”<sup>15)</sup>や同じセル画を何回も使用する“バンク・システム”など極端な省力化を行った。この作品は、最初の本格的な国産シリーズ・アニメーションとして画期的であったばかりでなく、連載漫画を原作にしていること、製作に極端な省力化システムを採用したこと、製作費を回収するためキャラクターの商品化(マーチャンダイジング)を行いまたアメリカに作品を輸出するなど、その後の日本のアニメーション製作や事業展開の原型ともなった。

## 第2章 1960年代前半の日本のテレビ放送

『鉄腕アトム』の第1話がフジテレビ系で放送されたのは、1963年(昭和38年)1月1日である。なぜ、『鉄腕アトム』がテレビ放送開始から10年目に始まったのか。この問いに答えるには、アニメーションを放送する側と製作する側、すなわち当時の日本のテレビ放送の成熟度とアニメーション製作会社やプロダクションの製作能力の両面から検証する必要がある。

『鉄腕アトム』の放送前には、東映動画が『白蛇伝』(58.10 公開)をはじめ『少年猿飛佐助』(59.1)や『西遊記』(60.8)など合わせて6作の劇場用長編アニメーションを製作している。また、テレビ放送でもアメリカのシリーズ・アニメーションと僅かではあるが国産の短編アニメーションが放送されている。しかし、国産のシリーズ・アニメーションの放送は「リスクが大きすぎて無理だというのが常識」「経費と時間、要員態勢などの理由で実現不可能」<sup>16)</sup>とされていた。

果たしてこれがどのように解決されたかは別稿に譲ることにして、本論では

1960年代前半の日本のテレビ放送を、編成と番組制作、事業経営の観点から考察することにする。

## 第1節 テレビ放送の量的拡大

1960年代前半は、日本のテレビ放送が放送局数、放送時間、視聴者数で急速な量的拡大を遂げ、現在に至る放送事業や番組編成の骨格を形成する時期である。

日本の放送史研究では、ラジオ時代（1925年から1960年代前半ごろ）、テレビ時代（1953年から1980年代半ばごろ）、多メディア時代（1982年から現在）と時代区分しているのが一般的である<sup>17)</sup>。この区分は、新たな放送メディアの登場を起点にそのメディアが支配的であった時期までを区切りとしている。このうちテレビ時代を、放送の普及、事業経営、番組制作、編成を基準にさらに区分すると、ほぼ10年ごとに前期・中期・後期に分けることができる。

このうち前期（1953年から63年ごろ）は、テレビ放送が急激に普及し、従来のラジオ放送に代わって主要な放送メディアとして確立する時期である。

日本のテレビ放送は、1953年（昭和28年）2月にNHK東京テレビジョン局が開局して始まり、8月には商業放送（民間放送、放送法では「一般放送事業者」と規定している）の日本テレビ放送網が放送を開始した。その後、テレビ放送局は57年の田中角栄郵政大臣による大量予備免許もあって急速に増え、『鉄腕アトム』が始まる63年にはテレビ放送を実施する一般放送事業者は47社に達し、全国のほぼ各県でNHK総合テレビジョン局と教育テレビジョン局、民間放送局1局（“1県1民放”）が開局するに至る（図1参照）。

東京では、日本テレビに続いて2年後の55年4月にそれまではラジオ放送だけ実施してきたラジオ東京がテレビ局（KRT、60.12東京放送（略称TBS）に社名変更）を開局した。また、59年には、2月に日本教育テレビ（NET、77.4全国朝日放送（略称テレビ朝日）に社名変更）、3月にフジテレビジョンが相次いで放送を始めた。この2局は、開局時期の遅れから、日本テレビとKRTの“先発局”に対して“後発局”と呼ばれた。こうして、テレビ放送開始から6年間で東京12チャンネル（64.4開局、81.10テレビ東京に社名変更）を除く現在の民放4局体制が整う。

放送の普及の指標とされるNHKのテレビ放送受信契約数は、1950年代後半

から始まった高度経済成長による個人所得の増加、受像機の大量生産と価格の低下、相次ぐ放送局の開局、59年4月の皇太子ご成婚の放送などを要因に、年間200万件から300万件という驚異的な伸びを示し、61年度末に1,000万件（世帯普及率49.5%）、63年度末に1,500万件（75.9%）を超えた（図2参照）。

また、1日平均の放送時間も、63年度末にはNHK総合テレビが17時間44分、民放が45社平均で14時間07分となり、午前6～7時台から午後10～11時台まで放送休止時間のない「全日放送」がほぼ実現する（図3参照）。

次のテレビ時代中期（1963年から74年ごろ）は、1964年の東京オリンピックを経てさらに成長を遂げたテレビ放送が73年秋の第1次石油危機によって一時的に停滞するまでの時期で、テレビ放送の拡大期にあたる。

この時期は、前期には放送局の置局が波長が長く到達範囲の広いVHF（Very High Frequency; 超短波）によって進められたのに対して、波長が短く県域放送に適しているUHF（Ultra High Frequency; 極超短波）によって行われ、各県で“民放2局目”の開局が相次いだ。民間放送のテレビ放送事業者は、1963年には47社であったが、74年には倍以上の105社を数えている。また、NHKのテレビ放送受信契約数は67年12月に2,000万件（世帯普及率83.1%）を超え、74年度末には2,574万件（91.7%）に達している。さらに、60年に一部の番組で始まったカラー放送が質量ともに発展し、71年10月にNHK総合テレビと日本テレビの放送が全時間カラーとなった。

『鉄腕アトム』は、このようなテレビ時代の前期から中期への移行期、すなわち日本のテレビ放送が急速な成長期から拡大期に入る境目の1963年に放送が始まった。これをきっかけに同年11月にはKRTが『エイトマン』、NETが『狼少年ケン』の放送を開始し、国産のシリーズ・アニメーションは2年後の65年には海外アニメーションを殆ど駆逐するまでとなる。

## 第2節 新興産業としての放送

1960年代前半の日本は高度経済成長期にあった。高度経済成長は1955年（昭和30年）ごろから73年（昭和48年）までほぼ18年間続き、その間の実質経済成長率は年率で10%を超えた。この間、鍋底不況（57～58年）、62年不況、65年不況など短期の不況を除いて、大半は神武景気（55～57年）、岩戸景気（58～61年）、いざなぎ景気（65～70年）などの長期の好況が続いた。

単位：社

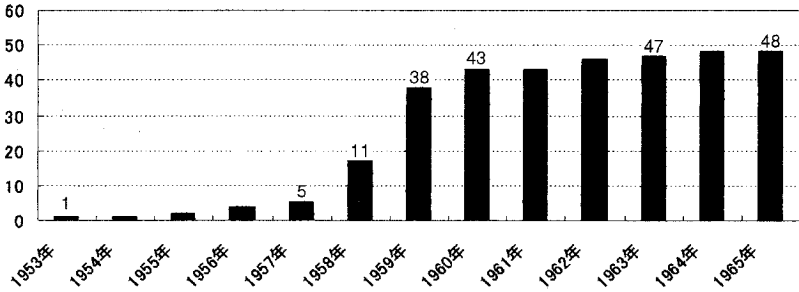


図1 民間テレビ放送事業者数の推移

単位：万件

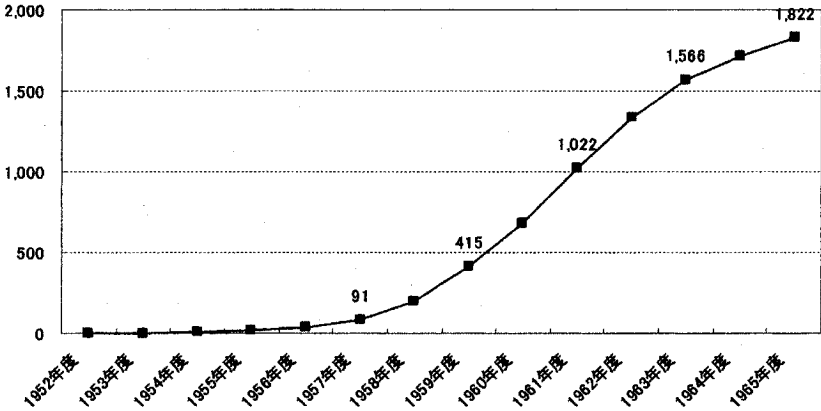


図2 NHK テレビ放送受信契約者の推移

単位：時間

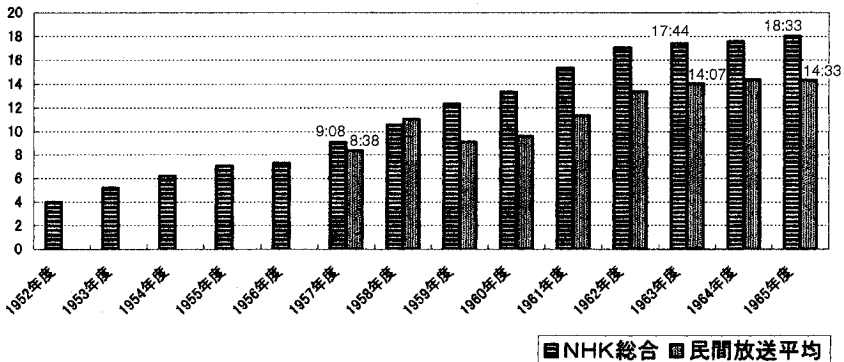


図3 テレビ放送時間の推移 (1日平均)



旺盛な個人消費と民間設備投資が高度経済成長を支え、技術革新と石炭から石油へのエネルギー革命が推進力として働いた。これを象徴するのが個人所得の増加による耐久消費財の急速な普及と“投資が投資を呼ぶ”と言われた重化学工業を中心とした設備投資の大幅な増加である。耐久消費財では“三種の神器”と呼ばれたテレビ受像機、電気洗濯機、電気冷蔵庫が、50年代後半から60年代前半にかけて驚異的な速度で普及した。普及は設備投資と個人消費の連関、つまり企業の設備投資によって大量生産が可能になり価格が低下して需要を拡大しそれがまた設備投資を生むという循環のなかで起こった。

なかでも白黒テレビ受像機の出荷台数は、1955年には約13万台だったが、60年には358万台、65年には461万台に達した<sup>18)</sup>。価格も下がり続け、例えば14インチの受像機の価格は55年には12万4,000円だったが、60年には5万4,000円から6万3,000円、65年には3万9,000円から4万9,000円と10年前の3分の1まで下がった<sup>19)</sup>。これに伴い、テレビ受像機の普及率が上がり、経済企画庁の消費者動向予測調査によると、60年の44.7%が65年には95.0%にも達した。

マスメディアもまた、高度経済成長の過程で急速に成長した。図4は、1955年度から65年度まで5年ごとに新聞、出版、放送の収入を示したものである。このうち、放送の収入（NHKと民放の事業収入の合計）はテレビ放送の収入の伸び<sup>20)</sup>に支えられて急激に増え、旧来からのマスメディアである新聞、出版の収入に迫っている。1955年と65年の収入を比べると、新聞が2.44倍、出版が3.95倍であるのに対して、放送は9.44倍にも増加している。放送の収入の伸び率は国民総生産の伸びを3倍以上上回り、国民総生産に占める比率も55年が0.25%、60年が0.28%、65年が0.29%と着実に上昇している。

このように、放送は、高度経済成長が始まる直前の1953年にテレビ放送という新たな媒体を得て、55年からの高度経済成長を追い風に急成長した新興のマスメディアである。その一方で、放送は、テレビの広告放送によって耐久消費財の大量消費を促し、放送局の開局と放送の拡大に伴う設備投資やテレビ受像機の販売を通じて電気機器産業の発展に貢献し、番組制作や広告を介して新たな産業分野の開拓と就業人口の増加に寄与した。この意味で、放送は高度経済成長を促進する要因ともなった<sup>21)</sup>。

新興のマスメディアとしての放送、特にテレビ放送の位置づけを示している

単位:億円

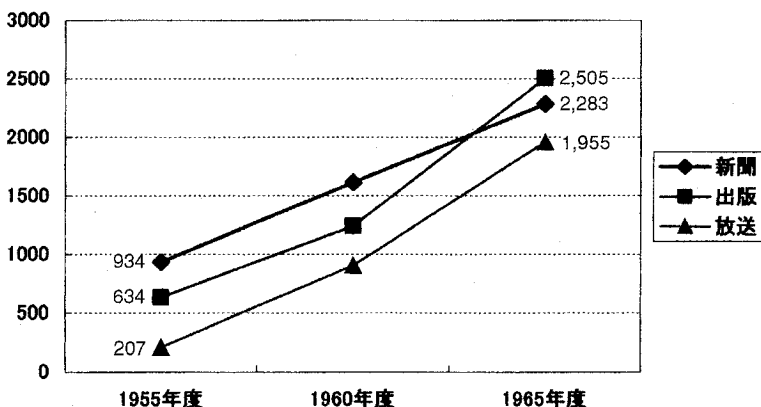


図4 マスメディアの収入

単位:億円

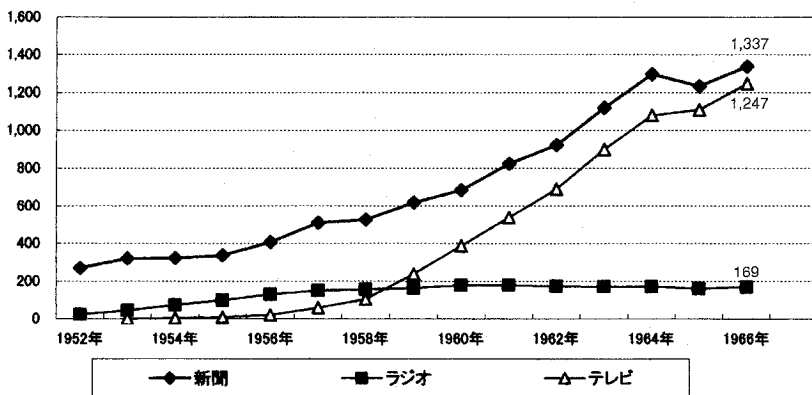


図5 媒体別広告費

もうひとつの指標が広告費である。これを媒体別に見ると、図5のようになる。テレビ広告費は放送開始から僅か6年目の1959年にラジオ広告費を上回り、63年には899億円（総広告費の30.1%）に達している。そして、75年には新聞広告費を抜いて媒体別広告費で1位となり、4,028億円（総広告費の32.5%）を記録する。

テレビ広告費が急激に増加した要因として、高度経済成長、放送局の増加、それに在京民放キー局による地方民放局の系列化（ネットワーク）が挙げられ

る。このうち在京キー局によるネットワークは、1960年から70年にかけてニュース交換協定を基本に形成<sup>22)</sup>されたが、やがて系列局による一般番組の放送に拡大して同一番組が全国で放送されることになり、テレビ放送の広告価値をいっそう高める要因として働いた。

また、1960年代初めに機械式の視聴率調査<sup>23)</sup>が導入されたことも、テレビ放送の広告価値を高める補助的な要因となった。これによって放送番組の広告価値が数字で客観的に示されることになり、視聴率による放送番組の序列化を招く一方で、高視聴率番組の広告価値をいっそう高める結果となった。

放送は基本的にサービスの提供を業務としているが、サービスの素材となる放送番組は外注率が高く、現在でも就業人口はNHKと民放を含めて約4万人、地上波放送の事業者数は200余り<sup>24)</sup>、国内総生産に占める事業収入の比率も約0.6%と低い。しかし、収入、換言すれば経済的価値を生み出していること、専業人口を擁していること、放送事業者がそれぞれ番組制作と放送のシステムを構築して国民生活に深く組み込まれていること、放送機器の受注や受像機の販売、放送の送信等を通じて電気機器産業や通信産業などの他産業と連関していること、さらに広告放送によって大量消費を促進していることなどを考えると、放送は小規模ながらも自立した産業と言えるのではないだろうか。この意味で、放送は、急速なテレビ放送の普及によって、1960年代前半に、以前のラジオ放送の時代とは比較できないくらいの産業的要素を持ち始めたという視点も成立すると思われる。

### 第3章 1960年代前半のテレビ編成

1960年代前半は、日本のテレビ編成にとって、放送休止時間のない全日放送に向けて放送時間の拡充が進む時期である。また、番組の国産化がテレビ映画とアニメーションの分野で進む時期でもあった。

東京では、1959年にフジテレビとNETが開局し、既に放送を始めていた日本テレビとKRTを合わせて民放4局体制となった。また、同年4月の皇太子ご成婚の放送を機にテレビ放送が急速に普及した。しかし、各局とも午前8時台から10時台までと午後1時台から4時台まで、1日4時間から5時間余りの放送休止時間があった。また、NHK、日本テレビ、KRTが休止時間も含めて

午前6時台から午後11時台まで放送していたのに対し、開局したばかりのNETとフジテレビは、終了時間こそ他局と変わらなかったが、開始時間はそれぞれ午前9時45分と10時30分であった。

こうした放送局による放送時間の違いや休止時間は、1960年度から2年間ではほぼ解消された。“不毛の時間帯”と言われた休止時間帯は、午前にはNHKが61年4月に連続テレビ小説第1作『娘と私』を始めて開拓し、午後にはフジテレビが60年8月に『日々の背信』を開始して主婦層を対象とした“昼メロ”の時間帯に塗り替えた。こうして62年度には、午前6時代から午後11時台までほぼ休止時間のない全日放送が各局で実現する。

全日放送でどのような種類の番組が放送されていたのか。『鉄腕アトム』の放送が始まる前年1962年（昭和37年）4月のテレビ番組予告表を見てみよう。表2に、NHK教育テレビを除く5局の4月第3週の月曜日の番組予告表を掲げた（KRTは1960年12月に東京放送（略称TBS）に社名変更）。

この表が示すように、放送番組の種類はニュース、ドキュメンタリー、学校放送番組、教養番組、ドラマ、映画、歌番組など殆どすべての分野にわたり、演出形式もスタジオ、フィルム構成、中継など多彩である。

番組編成では、NETが小中学校向けの学校放送番組を主に午前中に放送しているのを除いて、他の4局は多少の違いはあるものの報道・教育・娯楽番組の調和ある編成を行っている。これは後述するように、ほかが一般総合番組局であったのに対してNETが教育専門局であったことが原因である。

この時期の編成で特徴的なのは、民放4局が最も視聴率の高いゴールデンタイム（午後7時～10時）に一斉に外国映画を編成していることである。その数は月曜だけで8本<sup>25)</sup>にも上っている。他局と同じ時間帯に同種の番組を集中的に放送する“競合編成”は日本の民間放送の歴史を貫く特徴のひとつであるが、外国映画の競合編成には歴史的な要因が関わっていた。

## 第1節 国産映画の空白を埋めたアメリカ・テレビ映画

1950年代後半から60年代前半にかけての日本のテレビ編成の特徴のひとつは、外国映画の隆盛である。外国映画の殆どがアメリカのテレビ映画で占められ、その“氾濫”はフジテレビとNETが開局した59年から始まり64年ごろまで続いた。しかし、その後は競合編成による視聴率の低下や国産テレビ映画

の増加などによって放送本数が減少した（図6参照）。

アメリカ・テレビ映画の輸入第1号は、56年4月にKRTが放送を始めた『カウボーイGメン』（～56.10）と言われている。自主制作とスタジオものを主としていたNHKも7月に『口笛を吹く男』（～57.4）、10月に『ハイウェーパトロール』（～60.7）を開始した。残る日本テレビも8月に『ジャングルジム』、11月に『名犬リンチンチン』（～60.12）で後を追った。同じ11月には、KRTが『スーパーマン』（～59.4）を始め、翌57年には4月にNHKが『アイ・ラブ・ルーシー』（～60.4）、11月にKRTが『名犬ラッシー』（～64.3）の放送を開始した。

一方、後発局と呼ばれたNETとフジテレビは、後発の不利を克服するため、アメリカ・テレビ映画を売り物のひとつにした。フジテレビは開局と同時に『ペリー・メイスン』（59.3～68.3）を放送し<sup>26)</sup>、NETは開局年の11月から『ローハイド』（59.11～65.3）を始めた。

当時の日本は、56年の経済白書が「もはや戦後ではない」と書き、神武景気と岩戸景気で空前の好況に沸いていた。しかし、アメリカのテレビ映画はまばゆいばかりに豊かなアメリカの生活を映し出して視聴者の憧れを誘い、また56年秋に初めて日本語の吹き替え<sup>27)</sup>が放送され、高い人気を保った。

1960年代前半のテレビ編成でアメリカのテレビ映画が大きな比重を占めた要因として、次の3つが指摘される。第1は、テレビ放送局のいずれもが歴史が浅くスタジオ不足やタレント不足に悩まされ、また国産テレビ映画の製作体制も整っていなかったため、外国産のフィルム番組、特にアメリカのテレビ映

単位:本

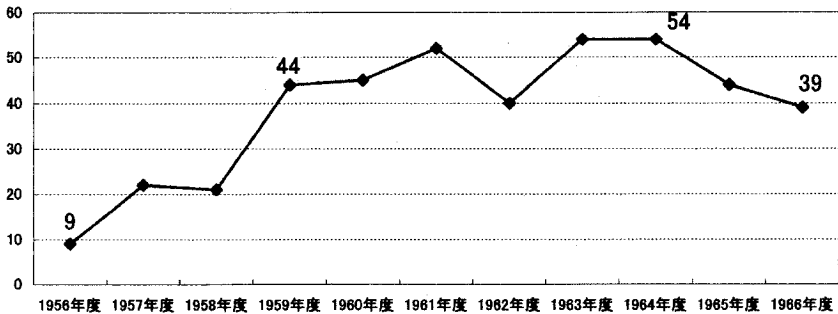


図6 アメリカ・テレビ映画の本数

表2 1962年4月の編成

【月曜日】

前6:00~後3:00

局名 時刻	NHK総合テレビ	日本テレビ	東京放送	フジテレビ	日本教育テレビ	局名 時刻
前				おしらせ 天気予報		前
6	朝のひととき ニュース・天気予報	おほようニュース	英語の教室	英語に流くなる時間	きょう4月16日・農事メモ	6
	朝のひととき くらしの相談室	テレビ体操		今日も元気で	あさのニュース	
	テレビ体操	スポニツニュース 今日のお天気	天気予報	おほようサンパシ		
7	ニュース 海外ニュース 天気予報	朝七時のニュース 今日のお天気	あさのニュース	プロ野球ニュース (再)	お笑いのタイムス	7
	きょうのこよみ 季節のふりか めかしの見聞 朝のひととき きょうの天気 ポカポカ天気 朝の歌謡	ニュース展望 本日のこよみ 話題を追って	海外ニュース 天気予報・旅行ガイド スポーツ・ファッション ポカポカ天気 現代の顔	テレビ新聞 一家そろって	おほようコソフ けさの話 海外ニュース きょうのお天気 スポニツニュース	
	おほようみんさん	あさのニュース テレビガイド・今日の天気	みんなの話	海外テレビニュース 天気予報	東西南北 (再)	
8	ニュース 連続テレビ小説 あしたの風 うたのえほん 茶の間の科学	テレビのおばちゃん	こぼとテレビ幼稚園	歌うおもしろ箱	歌は呼ぶ	8
	連続テレビ小説 あしたの風	マンガのおくに	漫画映画	マンガ大行進	水道完備ガス見込 (再)	
	うたのえほん	テレビ体操	表情の歴史	女性サロン	連続ニュース	
	茶の間の科学	テレビ家庭欄	おほよう流しめん おほようニュース	芸能ハイライト	家庭の手帳	
9	くらしの窓 あしたの風 きょうの料理 美容体操 きょうのうた	朝九時のニュース お笑いお楽しみ	お料理サロン		ニフコ株式会社況	9
	きょうの料理		お好み映画館 カクタン招待券	日治泉さま映画劇場 重の珍庄	わたしたちの道徳 (再)	
	美容体操				わたしたちの道徳	
	きょうのうた				おじさんのおはなし	
10	おかあさんといっしょ クッキング さんには		英語の教室 (再)	ホームメーカーアワー ここに釘	日本と世界 (再)	10
	縮入百科 いけばな			ワカワカコーナー	日本拝見	
11	くらしの科学 (再)	NTVニュース			おやおりにかにつき	11
	日本とところどころ (再)	女性ノート	フィルム構成 カノラブルタージュ (再)	くらしを明るく	百万人の英語	
	ポカポカ天気予報 お笑いお楽しみ		テレビガイド くらしの風 天気予報	アジテレニュース	NETニュース	
後	ニュース	日本テレビニュース	ニュース	ラジオ 一丁の三ちゃん	お昼の歌謡曲 天気予報	後
0	お好み風流亭	ママと一緒に	街の歌声	公開 ただ今昼休み	ハイティーン ミュージック ボックス	0
	連続テレビ小説 あしたの風(再) 梅村文彦	婦人ニュース	婦人ニュース	おとなの漫画 楽 再	水道完備ガス見込	
1	きょうの料理 (再) きょうのうた	連続テレビドラマ 花と花輪	こめねママ	ドラマ 肌の仮面	ベルベ あこがれのステージ (再)	1
	婦人の時間 この人の道 南家	キングアワー	キッチンキッコさん	料理の窓	テレビ 炎の河	
	ニュース	9,000万人の広場	週間スポーツ	芸能ハイライト(再)	婦人ジャーナル	
2	町から村から(L) おにぎ(再)	リレー構成 にっぽん	お茶の間映画館 興業のアマクセキ士	タワー・パワエティ タワープレゼント	夫と妻の記録	2
	うたのえほん(再)				みんな技術者 (再)	
	おかあさんといっしょ クッキング さんには (再)	アッコおアワー キングダフル 野郎一斉歌 クイズ		愛のダイヤル		
		NTV5より		おくらまき日誌		

後3:00以降

局名	NHK総合テレビ	日本テレビ	東京放送	フジテレビ	日本教育テレビ	局名
後						後
3		プロ野球中継 東映一週版	お茶の間映画館 嵐のアマリセ騎士 TBS ハイライト		ニコニコ株式市況	3
4	スポーツ中継 映画 再放送	アンソナター ワングフル クイズ		ニッサンテレビ名画座 お芝居とスバイ騒動	ドラマ この地果つるまで (再)	4
5		特別番組 佐野乾山討論会	ディスクタイム TBS ハイライト	おしるぎ 海外ニュース		5
6	ニュース 子どもニュース チロリン村とくろみの木 まんが	まんがショー まふと知育の音楽会 毎日新聞ニュース まんが	映画ニュース(再) 世界の話題 読売テレビニュース	外国テレビ映画 第八救助隊 フジ子どもニュース	夕べの音楽 おしらせ	6
7	オロップ牧場の仲間たち みんなのうた 黒百合城の兄弟 今晩の番組から 笑点下巻	牛若天狗いざ見参 ガイド カンロ カムカムショー ニュースフラッシュ 国際ニュース	マンガ劇場 テレビ映画 ワイリアム・テル テレビ夕刊	道のワイド 国内 宝塚テレビ映画 次郎長売り出す (再) フジテレビニュース つるいぞらアライ	まんが ニゴも世界のニュース ガイド・笑点下巻 オンワード なんでもクイズ NET ニュース 読者ニュース	7
8	ニュース バス通り裏 おし 私の秘密	テレビ映画 ポナンザ	テレビ映画 プロコッ・シャイアン	時代劇 竜虎八天狗 外国テレビ映画 アイ・ラブ・ルーシー	映画 風雲黒潮丸 金の星銀の星	8
9	歌の広場 上方劇場 おいでやア	教授と次男坊	しゃぼん玉劇場 シャボン玉ミこちゃん ドラマ 青年の樹	外国テレビ映画 チェックナイト	外国テレビ映画 ニューブリード	9
10	二つの橋 きょうのニュース スポーツニュース 海外フラッシュ	今日の出来事 スポーツニュース 寛レチャンピンアワー	ドラマ 咲子さんちよっと 月曜日男	スター千一夜 ヒットキッショ	皇室アルバム 外国テレビ映画 マイアミの戦探 おんなの恋	10
11	ニュースの焦点 日本縦断 科学時代 スポーツハイライト	夫婦百景 愛の劇場	ドラマ 花のれん ニュース 笑点下巻 スポーツニュース	外国テレビ映画 パリ指令69 時代劇 右門捕物帖 フジテレビニュース	風電劇場 風の視線 ドラマ 指名手配 NET ニュース スポーツニュース	11
12	あすへの歩み ニュース・笑点下巻 番組のおしるぎ	テレニュース あしらのお笑気・ガイド ニッポン問答 ニュース最終版	業高かおる世界の旅 海外ニュース 現代の顔(再) マルマン深夜劇場 金曜日の三巻	短編映画 プロ野球ニュース 英語に強くなる時間 (再) 明日のお笑気	夜このたま	

画に編成を頼ったことである。特に後発局のNETとフジテレビでは状況は深刻で、両局が開局した年の1959年10月にはNHKを含めて6局で1週間に32本のアメリカのテレビ映画が放送されていたが、その半数がNETとフジテレビによって占められていた<sup>28)</sup>。特にNETは多数のアメリカ・テレビ映画を放送し、“外画のNET”と言われた。

第2の要因は、アメリカのテレビ映画の量産、価格の安さ、購入する側の日本の外貨事情の好転である。ハリウッドは、1950年代前半にテレビ放送局に劇場用映画を売らない方針を採っていたが、テレビ放送が急速に普及したため経営難に陥り、従来の方針を転換してテレビ放送用映画の量産に乗り出した。これらの映画は、制作費を自国内の放送で回収し輸出はいわば“2次使用”であったため、30分1本で200ドル<sup>29)</sup>と比較的廉価であった。また、50年代後半に入って日本の外貨事情が好転し、当時実施されていた外貨規制が緩和されて放送事業者に対する外貨割当額も増加した。割当額は、56年度はNHKが6万ドル、日本テレビとKRTが4万ドルであったが、翌57年度にはそれぞれ9万ドル、6万5000ドル、6万ドルに引き上げられ<sup>30)</sup>、外国映画をより多く購入することが可能となった。

第3の要因は、1956年10月に日本映画連合会を結成していた大手映画製作会社5社（東宝、松竹、大映、東映、新東宝）が劇場用映画のテレビ放送への提供を打ち切り専属俳優の出演を許可制にしたことである（5社協定）。2年後の58年9月には、日本テレビに劇場用映画を提供していた日活も映画連合会に加盟して協定に加わり（6社協定）、日本の大手映画会社6社の劇場用映画は新作と旧作を問わずにそれ以降テレビで放送されなくなってしまった。この日本映画の空白は、61年7月に新東宝が破産し保有していた映画を放出するまで続いた。これを埋めたのが大量のアメリカ・テレビ映画であった。

## 第2節 海外アニメーションから国産アニメーションへの助走

海外アニメーションの放送が始まった時期は、アメリカ・テレビ映画の隆盛期と一致している。むしろ、海外アニメーションは、アメリカのテレビ映画とともに購入されそのブームに乗るかたちで放送が始まったとも言える。両者の違いは、アメリカのテレビ映画は家族向けにゴールデンタイムに大量に放送されたが、海外アニメーションは子ども向けであったために放送時間帯も本数も



限られていたことである。

どのような海外アニメーションが『鉄腕アトム』以前に放送されていたのか。テレビ放送が始まった1953年から62年までに放送された海外アニメーションを文献によって調査した。これらの文献は『NHK総合テレビ番組確定表』を除いて4月の定時番組だけを掲載しているため、単発番組や4月以外に放送が始まり年度内に終了した定時番組は記していない。また、この時期には未だアニメーションという言葉が使われず「漫画映画」あるいは「漫画」と表記されており、外国産かどうか不明なものがある。さらに『まんが劇場』や『マンガ大行進』など番組名だけ掲載され内容が判明しないものもある。

調査の結果、『鉄腕アトム』以前に放送されたアニメーションの定時番組は、殆どすべてが海外アニメーションと推定される（表3参照）。

まず、NHK総合テレビは、56年度から62年度まで7年間にわたって毎日『漫画』という番組枠<sup>31)</sup>を設け、7分程度のアメリカの短編アニメーションを大量に放送している。これらの海外短編アニメーションは当初は番組枠の“埋め草”として、61年度以降は新設された「こどもの時間」の売り物として放送されている。

この番組枠で、56年度（19:00～07）はサンセット社などから購入した7分

表3 主な海外アニメーション（1956年～62年放送）

放送局	タイトル	放送期間
NHK (総合テレビ)	『クレージー・キャット』	1959.4～61.3
	『ポーキー・ビッグ』	1959.4～61.3
	『スクラッピー』	1959.4～61.3
	『フェリックス君』	1961.4～62.3
	『鉄腕ポバイ』	1961.4～62.9
日本テレビ	『テレビ坊やの冒険』	1956.4～56.9
	『ミッキーマウスクラブ』	1959.9～61.8
	『ウッドベッカー』	1961.9～64.8
KRT(TBS)	『マイティ・マウス』	1957.8～58.4
	『ヘッケルとジャッケル』	1957.10～58.6
	『ポバイ』	1959.6～65.8
フジテレビ	『ワンワン保安官』	1961.4～62.1
NET	『珍犬ハッケル』	1959.2～64.3
	『早射ちマック』	1960.1～66.3
	『バックスバニー』	1961.4～66.3

のアニメーション、57年度(18:00～10)はワーナー・ブラザーズ社の7分のアニメーション100本とソビエト製の『金色の矢』や『黄金のりんご』など10本、58年度(18:00～10)、59～60年度(18:00～07)は『クレージーキャット・シリーズ』『ポーキー・ピッグ・シリーズ』『スクラッピー・シリーズ』『ファンタジー・フェイブル・シリーズ』、61年度は『フェリックス君』『鉄腕ポパイ』(17:35～45)と『カレイジャス・キャット』『ロッキー君とゆかいな仲間』(18:00～15)、62年度は『鉄腕ポパイ』(17:54～18:00)を9月まで放送している<sup>32)</sup>。59年1月から日本語による吹き替えを行い、60年7月から東京・大阪でカラー放送となっている。

一方、民放<sup>33)</sup>では、日本テレビは56年4月から日本語の吹き替えで『連続冒険漫画 テレビ坊やの冒険』(日曜18:05～15)、59年から『ミッキーマウスクラブ』、61年から『ウッドペッカー』(土曜19:30～20:00)を放送している。

また、KRTは57年から『ミルクィ劇場 マイティ・マウス』(57.8～58.4日曜19:30～20:00)と『漫画劇場 ヘッケルとジャッケル』(57.10～58.6金曜19:00～30、61年からNET系で放送)、59年から『ミルクィまんが劇場ポパイ』(59.6～65.8日曜19:30～20:00)を放送している。

フジテレビは61年から『外国まんが ワンワン保安官』(水曜19:30～20:00)、NETは開局直後の59年2月から『まんが映画 珍犬ハックル』(日曜18:00～30)と『まんが映画 一本足のキリギリス』(水曜18:15～45)、60年から『大商漫画劇場 早射ちマック』(月曜19:00～30)、61年から『カルピス漫画劇場 バックスバニー』(水曜19:00～30)を放送している。

これらの海外アニメーションは殆どがアメリカ製と推定<sup>34)</sup>され、第2次世界大戦前から戦後かけて製作された古典的なものと50年代後半にアメリカの3大ネットワークやシンジケーション<sup>35)</sup>で放送された新作とに分けられる。

NHKが放送した『クレージーキャット』(*Krazy Kat* George Herriman 1929～49製作)、『鉄腕ポパイ』(*Popeye the Sailor* Max Fleisher 1933～57製作)、『フェリックス君』(*Felix the Cat* Pat Sullivan 1920～36製作)、『スクラッピー』(*Scrappy Dick* Huemer 1931～41製作)は、前者に属する古典的な作品である。

一方、日本テレビの『ミッキーマウスクラブ』(*The Mickey Mouse Club*)と『ウッドペッカー』(*Woody Woodpecker*)は、前者が3大ネットワークの

ABCが1955年から59年に放送した*The Mickey Mouse Club* (Walt Disney Production 1955～59製作)、後者が同じABCが57年に放送した*Woody Woodpecker Show* (Walter Lantz 1940～1972製作)と判断される。いずれもアメリカで人気のあった子ども向けのバラエティ番組で、題名のアニメーションが挿入されている。また、KRTは『マイティ・マウス』(*Mighty Mouse* Paul Terry 1942～61製作)と『ヘッケルとジャッケル』(*Heckel and Jeckle* Paul Terry 1946～66製作)を放送しているが、恐らく戦後の製作であろう。

これに対して、NETはアメリカで放送された直後のアニメーションを編成しているのが特徴である。例えば59年から始まった『珍犬ハッケル』は58年10月からアメリカのシンジケーションで放送された*The Huckleberry Hound Show* (Hanna-Barbera Production)、60年から開始した『早射ちマック』は59年からシンジケーションで放送された*Quick Draw McGraw* (Hanna-Barbera Production)、61年から始まった『バックスパニー』は60年10月からABCで放送された*The Bugs Bunny Show* (Warner Brothers)である。

これらアメリカのアニメーションにはフルアニメーションとリミットドアニメーションが混在しており、動物を主人公に単純な筋書きで滑稽な仕草や誇張した動きを描いている。そのキャラクターのスピーディで奇抜な動き、優れた技法、量の多さは、その後の日本のテレビ・アニメーションの大勢がストーリー性に富んだ劇画調の方向に進んだとは言え、日本のアニメーション作家やその予備軍を圧倒し創作意欲を刺激したに違いない。また、その放送時間帯が国産アニメーションで代替されてゆく経緯を見ると、海外アニメーションの放送は国産シリーズ・アニメーションの放送への助走となったと考えられる。

### 第3節 「映画」国産化の進展

1960年代前半ごろまでの日本のテレビ放送では、フィルムによる番組はすべて「映画」と表記されてきた。これは放送局が自前のフィルム番組製作能力を持つ以前の過渡的な事象で、ニュース・フィルムやドキュメンタリーを製作するようになると、60年代後半からは映画会社が製作する劇場用映画やテレビ用映画を除いて「映画」という表記が消滅する<sup>36)</sup>。この言葉の変遷にも日本のテレビ放送が外国映画や日本映画への依存から自立する過程が現れている。

第1節でも述べたように、日本の大手映画会社は1956年10月に5社協定、

58年9月に6社協定を結び、新作と旧作とを問わず劇場映画をテレビ放送に提供することを禁止した。その一方で、民間テレビ放送局の設立に参画し、東映・日活・新東宝がNETに、東宝・松竹・大映がフジテレビに出資した。大手映画会社は、新しく登場したテレビ放送を映画の存在を脅かすものとして門戸を閉ざすと同時に、その将来性にも備えたのである。

日本の映画産業は1950年代後半から最盛期を迎え、58年には映画館数が7,000、観客数が10億人、新作が400本を超え、その勢いは60年まで続いた。しかし、58年をピークに観客数と製作本数が減少に転じ、61年から凋落の傾向が顕著になった。61年7月には新東宝が倒産し、在庫559本のうち360本をテレビ放送用に売却することとなった。これによって6社協定の一部が崩れ、各社とも2年後の64年2月に、公開後7年後の映画、初年度は1社100本、放送回数2回という条件をつけて、劇場用映画のテレビ放送への提供に方針転換した。

大手映画会社は、それ以前から国産のテレビ映画の製作にも着手していた。東映はほかに先駆けて56年11月に東映テレビ・プロダクションを設立し、まず子ども向けテレビ映画の製作を始めた。同プロダクションは、1シリーズ30分13本、使用フィルムは劇場用映画の36ミリではなく16ミリという方針を立て、『風小僧』『七色仮面』『白馬童子』などを製作した。そして、資本関係があり東映社長の太田博氏が社長を兼任していたNETで54年の開局早々から放送を始めた。これはNETが教育専門局で教育番組を多く編成する義務があったことに起因するもので、ここで論じている大人向けのテレビ映画の国産化には必ずしも該当しない。しかし、東映テレビ・プロダクションは、その後アメリカ・テレビ映画ブームが起これると、61年から国産テレビ映画のワイド化(60分)に踏み出し、『特別機動捜査隊』(61.11～77.3 NET系で放送)とその姉妹編『JNR 公安36号』(63.8『鉄道公安36号』に改題、62.6～67.3 NET系で放送)などを次々に製作した。

国産テレビ映画の製作が本格化するのには、1962年ごろからである。大手映画会社がテレビ室を新設し、在京民放各局も対応する部局<sup>37)</sup>を設けた。国産テレビ映画の製作は、メジャー系と呼ばれた大手映画会社のテレビ部門や系列会社と、銀座プロ、テアトロ・プロ、日本電波映画などの独立系プロダクションが担った。

TBSは、58年に宣弘社製作の『月光仮面』（58. 2～3放送）を短期間放送した後、61年10月の番組改定で国産テレビ映画の1時間編成（ワイド化）を打ち出した。そして、大映テレビ室製作の『人間の条件』（62. 10～63. 4放送、26回）を放送しそれが成功すると、月曜午後10時台を大映テレビ室の専門枠として翌63年には『図々しい奴』『赤いダイヤ』などのヒット作を出した。日本テレビも、63年以降、日活テレビ室製作の『青春アワー』、大映テレビ室製作の『この酒盃を』、東宝テレビ室製作の『青春とはなんだ』などを放送した。NETは、63年1月に東映テレビ・プロダクションと1週間あたり5番組5時間のテレビ映画を製作する基本業務協定を結び、国産テレビ映画の量産化に備えた。

一方、これまで日本映画の空白を埋めていたアメリカ・テレビ映画の放送本数は、1964年をピークに減少し始める。そして、その減少分を今度は国産テレビ映画が埋めることになる。

図7は、63年10月と67年10月のゴールデンタイム（午後7時～10時）に放送されたアメリカ・テレビ映画と国産テレビ映画の本数と時間を比較したものである。63年に48本・34時間30分あったアメリカ・テレビ映画が67年には20本・15時間と半分以下に減っている。逆に国産テレビ映画は、15本・11時間から53本・38時間30分と3倍以上伸びている<sup>38)</sup>。また、ゴールデンタイムの中核をなす午後7時台と8時台を見ると、アメリカ・テレビ映画は63年には合わせて41本放送されていたが、67年には10本に激減している。反対に国産テレビ映画は、63年の8本が67年には34本と飛躍的に伸びている。国産テレビの内容時間も63年には1時間ものは7本だったが、67年には25本に増え、番組の“ワイド化”と製作能力の向上を裏付ける結果となっている。

こうした国産テレビ映画の著しい増加は、日本の映画産業と放送の関係の逆転を物語っているようである。かつてテレビ画面を空白にした映画産業は、テレビ放送という新興勢力の勃興に遭遇して、テレビ放送への依存度を高めてゆく。必ずしも適切でないかも知れないが、1960年度から70年度までの映画の興行収入と放送事業者の事業収入（NHKを含む）を5年ごとに対比した（図8参照）。この図が示すように、60年度には映画の興行収入が533億円で放送事業者の事業収入207億円の倍を超えているが、65年には映画が728億円、放送が907億円となって逆転し、70年には映画が755億円、放送が1,955億円と

単位:本

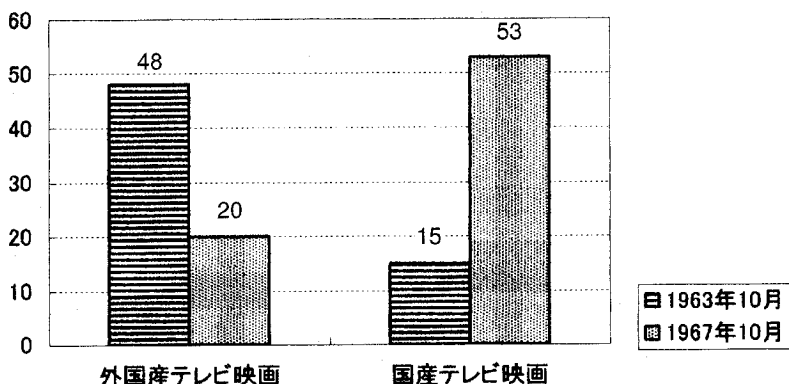


図7-1 外国産テレビ映画と国産テレビ映画の放送本数 (ゴールデンタイム)

単位:時間

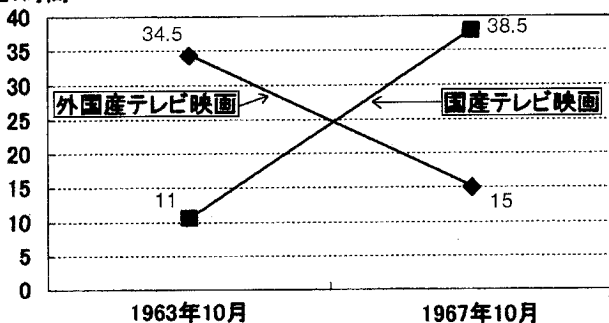


図7-2 外国産テレビ映画と国産テレビ映画の放送時間 (ゴールデンタイム)

なり、放送が映画の2.5倍以上に達している。この変化は、放送が収入規模で映画産業を凌駕して映画産業を支援産業として配置してゆく過程を示しているのではないだろうか。

単位:億円

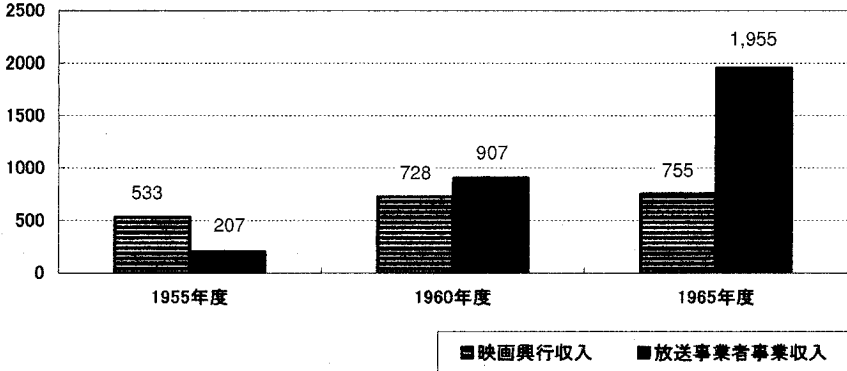


図8 映画興行収入と放送事業者の事業収入

#### 第4節 子ども向け番組の編成

「映画」の国産化の進展は、子ども向けの時間帯の午後6時台でも見られる。国産最初のシリーズ・アニメーション『鉄腕アトム』も、63年1月からこの時間帯で（火曜18:15～45）始まった（64年1月から土曜19:00～30に移行）。このため、この節では『鉄腕アトム』放送前後の1962年度から64年度までの4月第3週の午後6時台の各局の編成を比較することにする。表4にNHK総合テレビ、日本テレビ、TBS、フジテレビ、NETの午後6時台の編成を示す。

まず1962年4月の午後6時台の編成で注目されるのは、第1にNHKが午後5時30分から7時までを「こどもの時間」と位置付け、6時台に少年・少女向けドラマ『黒百合城の兄弟』などを、その前の5時台に『こどもニュース』、人形劇『ちろりん村とくるみの木』（56.4～64.4放送）、『まんが』を集中的に編成していることである。一方、民放は午後6時台に「外国映画」あるいは「テレビ映画」と表記したアメリカ・テレビ映画を毎日のように編成している。その数は1週間で14本を数える<sup>39)</sup>。海外アニメーションは僅かに1本、NETの『外国まんが映画 珍犬ハックル』（火曜18:15～45）だけである。

翌63年4月には、NHKが『まんが 宇宙家族』<sup>40)</sup>（63.4～63.12放送）、フジテレビが『鉄腕アトム』（火曜18:15～45、同年1月から放送）、TBSが初めてのキャスターニュース『ニューススコープ』（月曜～金曜18:30～50、前年10月から放送、初代キャスターは戸川猪佐武と田英夫）を編成しているのが特徴である。TBSの『ニューススコープ』はNHKが60年4月から始めた

表4 午後6時台の編成(1962年~1964年)

1962年4月

	NHK総合	日本テレビ	TBS	フジテレビ	NET
月	オロップ牧場の仲間たち みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		カンロ カムカムショー	テレビ映画 ウィリアム・テル	宝塚テレビ映画 次郎長売り出す (再)	オンワード なんでもクイズ
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
火	ぼくもわたしも名探偵 みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 ビーバーちゃん	テレビ映画 がんばれキャノンボール	外国テレビ映画 ローレンレンジャー	外国まんが映画 珍犬ハックル
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
水	魔法のじゅうたん みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 ミッキーマウスクラブ	ゆうかん太郎	共同テレビ映画 若い炎	平凡 歌のペナントレース
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
木	あすをつげる鐘 みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 大海賊バイキング	テレビ映画 ラマ・オブ・ジャングル	外国テレビ映画 アニーよ銃をとれ	ベルべ あこがれのステージ (最終回)
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
金	ドラが鳴る みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		レッツゴー・ティーン	テレビ映画 警察犬キング	外国テレビ映画 名犬リンティ	外国テレビ映画 サーカスポーイ
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
土	走れチエス みんなのうた ゆり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	あしたの行楽地 こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 モーガン警部	テレビ映画 ヒューリーと ベレル少年	宝塚テレビ映画 次郎長売り出す	雷印ホームジュスチャー
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
日	ボンボン大将 危険信号 今晚の番組から 天気予報	たのしい科学 スター・ロータリー	コメディ アチャコ どっこい御用だ	コメディ 一心茶助	外国テレビ映画 ハーバーコマンド
		シャボン玉ホリデー	コメディ 青春タックル	外国テレビ映画 愛馬フリッカ	外国テレビ映画 ハイウェイパトロール